

Title	オープンな知識生産を支援する場としての学会の役割
Author(s)	敷田, 麻実
Citation	第24回「野生生物と社会」学会大会プログラム・講演要旨集: 72-72
Issue Date	2018-11
Type	Presentation
Text version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10119/16916">http://hdl.handle.net/10119/16916</a>
Rights	Copyright (C) 2018 「野生生物と社会」学会. 敷田麻実, 第24回「野生生物と社会」学会大会プログラム・講演要旨集, 2018, p.72.
Description	セッション: 「野生生物と社会」の知は誰のものか? : オープンサイエンス時代の知の生産・共有・活用のあり方

## オープンな知識生産を支援する場としての学会の役割

### The role of academic society as a ba for open knowledge creation

敷田 麻実

Asami SHIKIDA

野生生物と社会学会は、野生生物保護学会から名称変更し、「社会」を学会名に採り入れた。それは野生生物の保護管理が社会と密接に関係し、両者の相互作用の重要性を学会が認識したからである。では、社会と関係するとはどのようなことを指すのであろうか。おそらく学会員が地域ボランティアで社会貢献するのではなく、学会の持つ強みを生かした関係の構築であろう。

ここでいう学会の強みとは、新しい知識を生み出す、「知識創造」である。この学会でも、学会発表や論文による新しい知識生産と発表、共有と蓄積という学会の知識生産システムによって知識創造が自律的に進められてきた。生み出された知識はテキストにできる「形式知」であり、学会誌や学会発表の記録として蓄積された。

こうした科学的知識の蓄積は、次の知識生産につながる。また学会員の相互評価が昇格システムと連動することで、知識創造にインセンティブが働き、このプロトコルを理解する専門家による閉じた共同体となった。しかし、専門家しか理解できない、社会と共有しにくい知識を生み出し、それを社会で活用するには「科学技術コミュニケーション」に頼らねばならなかった。

ところが、複雑化した社会での問題解決では、学会ではなく獣害などの問題が発生する現場で知識が生産されはじめた。従来、現場は暗黙知、学会は形式知と区別していたが、現場からも共有可能な形式知、科学的知識が生まれるようになった。また ICT 分野では「オープンソース」のような、参加が自由で、コラボレーションによって新しい知識を生み出す仕組みも実現している。さらに科学分野でも、市民参加や ICT の活用を核にした「オープンサイエンス」が議論され始めた。オープンサイエンスは、上記のオープンソースの考え方に倣い、多様な参加によるイノベティブな知識創造である。また、新しいだけではなく、専門家以外（いわゆる素人）も参加できることがオープンサイエンスの特徴である。まだ議論の余地はあるが、「集合知」という多数の意見から確からしい答を導く知識生産方法も関心を集めている。

学会はこうした社会の変化を理解しながらも、やはりピアレビューによって支えられた質の高い知識に固執し、知識生産の主体になることにこだわっている。それは学会誌が、専門の研究者にとって有利な、データに基づく帰納的なアプローチを主に採用してきたことにも現れている。しかし、問題解決のための知識が広く社会に分散する現代社会で、オープンシステムによる知識生産が拡大し、学会の知識生産システムと社会の求める知識が一致なくなっている。

以上のことを考えれば、今後の学会は、知識生産の自前主義へのこだわりを捨て、オープンサイエンスを基本とした、知識生産と活用を支援するファシリテーターや、多様な関係者が活用できる知識生産の「場」の開設者になるなど、新たな役割を求められている。また、オープンにしかただけでは、集合知による低俗な知識生産になるリスクもあり、その解決のための新たな役割が、専門家に期待されている。オープンサイエンスのような知識生産を、専門性への挑戦と畏れることなく、知のコモンズの拡張と考え、会場で議論したい。